

シンポジウム

家族看護実践における文化的能力
～「文化」の視点を取り入れた家族看護の可能性～
岩崎弥生（千葉大学看護学部）

文化的能力

文化的能力という考えは、人種的にも民族的にも多様性が増大している米国で、保健医療へのアクセス及び保健医療の質における民族間の格差を縮小することを目的に発達したもので、しばしば、対象者の多様な価値観や信念を理解し、彼らの社会的・文化的・言語的ニーズを満たすことを意味する（Betancourt, 2002）。しかし文化的能力が目指すところはもう少し広く、「一つのやり方に全員を従わせる」といった現行の保健医療システムから、多様な対象者に対応できるシステムに転換することを含んでいる（Betancourt, 2005）。そして、多様な対象者に対応できるシステムというのは、利用者の個別性に配慮したシステムに他ならない。

「文化」の視点

「文化」の視点は、事象の多様性・状況依存性を前提としている。たとえば、一つの家族のあり方や機能の仕方が主流であるとしても、それが絶対的、普遍的なものだというとらえ方はせずに、そうした家族のあり方や機能の仕方は、ある特定の時代の特定の心理社会的背景から生じたものだったといった考え方をする。換言すると、看護職者には、どのような家族であれ、そのあり様も機能の仕方も含めて、優劣や善悪の立場から理解するのではなく、その文脈からとらえる能力が求められることになる。

同様に、「文化」の視点からは、家族看護の重要な概念である家族システムといった概念自体、一つの時代の特定の文化の家族のとらえ方にすぎないと考えるわけである。すなわち、「文化」の視点は、自文化の絶対性を疑い相対化することを内包しているため、自分達の事象のとらえ方を問い直し、固定化したもの見方から抜け出す必要があるときに有用な視点といえる。時代や社会の影響を受けて生成され変容し続ける家族を看護する場合、こうした相対化の考えが重要になるだろう。

「文化」の視点を取り入れた家族看護の可能性

すべての家族は異なり、それぞれ独自の文化を持っているとされていることから、家族を援助する看護職者には、「文化」の視点が不可欠と言ってよいであろう。「文化」の視点を家族看護に取り入れることは、個々の家族文化を尊重した看護について考えることを可能にするだけでなく、家族文化と看護文化という二つの文化の出会いという観点から家族看護実践について検討することも可能になると考えられる。

参考文献

- Betancourt, JR (2002) Cultural competence in health care: Emerging frameworks and practical approaches. The Commonwealth Fund Report, <http://www.cmwf.org/>
- Betancourt, JR, Green, AR, Carrillo, JE, & Park, ER (2005) Cultural competence and health care disparities: Key perspectives and trends. *Health Affairs*, 24 (2), 499–505.